

自信

第19期 富江 克優

「根拠のない自信を持て。」高校の剣道部時代に耳にタコができるほど聞いた言葉である。どのような相手が来ても自分なら勝つことができると、そう思いこむことによって、緊張がほぐれて、本番で稽古の成果を十分に発揮できるという考えの元、当時の先生や先輩に何度も指導を受けたが、表面上では同意を示したものの、心の奥深いところでは懐疑心を抱いていた。なぜなら、私は、自分に自信がなかったうえに心配性であるからだ。まだ認識もしていない敵に勝てると思いきむことなど困難極まりない。勝つための策を講じて、そのために多くの稽古を積んだうえでやっと自信が芽生えてくるものであると考えていた。不確実な未来に対する不安を少しでも解消すべく、様々な準備を徹底して行い、安心材料を増やしたいと考えるような性格である私は、「根拠のない自信」を肯定することなどできなかった。

特に、高校生時代は、勉強や部活動の面において、先に述べたような「自信に対する考え方」が研ぎ澄まされていった。私が入学した高校は、勉強ができることは当たり前で、その上、特異な才能をもつ人が多く存在していた。人生で初めて挫折した瞬間であった。同級生と比べて、ありとあらゆる分野において、何一つとして秀でた部分や独自性がないと感じた私は、アイデンティティを喪失したような感覚に陥り、自信を持つことができなかった。「このままでは、この学校生活についていけなくなるのではないか。」そう感じた私は、自分を安心させるために、空き時間は勉強に費やし、放課後や休日は部活動に費やした。学力も体力もなかった私にとっては、そこまでしてようやく、同級生と同じスタートラインに立てたような、そんな感覚を抱いていた。

自信が持てず、不安に駆られて行動していた私であったが、今の私は、不確実性の高い将来に対する不安を抱いていない。むしろ、何があってもなんとかなるとさえ思っている。そう、自信に満ち溢れているのだ。「根拠のない自信」を肯定できずにいた、心配性な私に、いったい何があったのであろうか。

小野ゼミでの活動を振り返って、大きく変わった点を挙げるならば、それは、いかなる場合においても自分に“自信”を持つことができるようになった点である。

多くの活動の中で、生じた困難は、もはや全てを数えきることができない。ビジコンにおいては、自信をもってプレゼンしたアイデアに賛同を得られず撃沈。ディベートにおいては、私が担当していた、立論が相手の資料に入っておらず、一言も反駁ができずに終了。三田論においては、計画通りにいかない状況に思い悩み、眠りが浅くなり、CHILLOUTというリラクゼーションドリンクを体内にぶち込んで眠ろうとする惨状。卒論執筆においては、第3章の仮説提唱パートがイロジカルだとコメントをいただき、章の構成を大幅に変更せざるを得なくなるような始末。

しかしながら、このような私でも、自信をもって言えることがある。それは、1つ1つの活動に真正面から情熱をもって向き合ってきたということだ。おもしろさと有用性を兼ね備えたビジコン企画を案出しようとした夜も。わかりやすさを追求すべく、昼間からZOOMを繋ぎ続けてディベート資料の修正をした夜も。夏休みであっても毎日のように同期とZOOMして、海外の文献を読み漁っては仮説案を作り続けた夜も。秋葉原や池袋での街頭調査の後、そのデータを用いてSASの画面とにらめっこし続けたり、マル

チレベル分析のコードを解読しようと狂いかけたりした夜も。三田祭論文を仕上げるべく、先生や先輩方に手助けをいただきながら、同期と何度も何度も本文の推敲と修正を行った夜も。マケ論、四分野インゼミ、海外学会に向けて、スクリプトを覚えようとしつつも寝落ちした夜も。卒論の構成に関して、本ゼミ終わりの研究棟談話室で、私の汚い字と図でもって、必死に先生に相談させていただいた夜も。あらゆる資料のあらゆる構成や誤字脱字、書式を確認し続けた夜も。

こうした多くの夜を越えて、私は、揺らぐことのない“自信”を手にすることができた。自信が持てず、将来への不安に駆られた行動しかしていなかったような過去の自分を変えてくれた、小野ゼミという素晴らしい環境に身を置けた私は、本当に幸せ者だ。

(謝辞)

ここからは、私と関わってくれた全ての人に、謝意を述べたいですが、数十ページに及ぶことになると思われるため、特にお世話になった方たちに向けて、コメントさせていただきます。

小野晃典先生へ。2年間ご指導をいただき本当にありがとうございます。我々に対して、常に愛をもって接して下さっただけでなく、活動に行き詰まり、路頭に迷う我々を見て、優しく手を差し伸べてくださいました。小野先生の中で、学ぶことのおもしろさに気づくことができ、私は本当に幸せです。また、3年時に、年賀状にて先生から頂いたお言葉が大変嬉しく、今もまだ作業机の上に置いてあります。そして、韓国にて学会発表を終えた日の夕食時、私の進路やキャリアに関して、奥様と共に親身になって相談に乗ってくださり、ありがとうございました。社会人になっても小野ゼミという素晴らしい環境で学んだことを活かして、邁進して参ります。

森直也さんへ。ゼミ活動のあらゆる面において助けてくださり、本当にありがとうございます。私が三田論代表として壁にぶつかり思い悩むたびに、何度も相談に乗ってくださいました。夜中に三田論や卒論の相談や添削の依頼をさせていただいた際にも、嫌な顔一つせずに対応して下さる森先輩の姿を見て、森先輩のような人間になりたい、と心の底から思いました。(今も思っています。)4年生になってから、ゼミ以外の事についてもお話させていただく機会が増えて大変嬉しかったです。ずっと尊敬しています。

18期の先輩方へ。1年間、本当にありがとうございます。特に、3年生の前期に、個人的な事情で、何度も心が折れそうになっていたときに、それを察してたくさんの温かいお声がけをいただきました。そのお声がけがあったからこそ、挫折することなく、ゼミ活動に取り組むことができたのだと思います。また、ゼミに不慣れな3年前期の夜を、何度も ZOOM で救っていただきありがとうございました。さらに、ゼミ活動はもちろんのこと、就職活動においても大変お世話になりました。また、ご飯に行きたいです！

清乃へ。ゼミ長、本当にお疲れ様。清乃がいなかったら組織が崩壊していたと思う。三田論の期間には、一緒になって計画を立ててくれたり、やるべきことを考えてくれたりして、何度も救われたし、清乃を見て、もうちょっと頑張ろうって踏ん張れました。性格が似ているからか、普段のゼミでも、話したり相談したりする機会が多くて、本当に心強かった。同期として、そして、ゼミ長として清乃がいてくれて本当によかった。ありがとう。